

「おい佐助どん。良え加減にしときんかいな。何云ふてるのやそら……。」

「何ぢやい。云ふたらどやちウね。ヒツ。何吐しやがんね。おい藤七モツと酌げ……ピク／＼すないアツハツハツハ。併し考へるとおもしろい物やなア。あんな泣き味噌の若旦那が、女の一人も拵えるやなんて、アハハハハ。眞面目な顔しやはると餘計おもしろい……アハハハハ、アハハハハハ。ウーイ。若旦那、御免やすや。甚い管まきましてな。なア。古い奉公人やと思やこそ。何云ふても勘忍して呉れはんね。あゝ結構な事や。……イヒツ。嬉しい。……若旦那ア佐助は喜んでります……イヒツ。死ん……死んでも忘却は致しまへん……イヒツ。イヒツ。……こら藤助。何笑やがんね。いやいな、何で笑やがんのぢやい。ウーイ。アハハハハ……吃驚しよつた、アハハハハハ。おもしろい顔しよつたアハハハハ。藤助とん堪忍してや。ウーイ。よう知つてるのやで……お酌いで呉れるか、大きに……ア、——親切にして呉れるなア、大きに……嬉しいでわいは……イヒツ。イヒツ。グー、ムニヤ／＼。何ぢやいこら……グー、ムニヤ／＼。……アハハ……おもしろい……グーグー……結構でおます……ウーエン……ムニヤ／＼、グーグー、グー／＼／＼／＼／＼。」

「ア、寢て仕舞ひよつた。何と悪い酒やなア。一人で三人上戸皆遣つて仕舞やがんね。……此奴にグズ／＼云はれて、他の者は皆醉が醒めてしもたやろ、さア熱うして大きな物でドン／＼遣りや。番頭はどないしてゐるね。」

「ウー、ふわア／＼。」

「ア番頭こないなつてよる。さア皆飲んだ飲んだ……さア、菊江お前もちと飲んだらどうや、根から酔ふてやへんがナ。」

「若旦那、貴方こそまだ素面ですがナ。そら酔ふやうな氣持に成れまへんやろけど。」

「何んでやね。」

「大事の／＼御寮人さんが病ふてゝだすねもんな。」

「おい、もう彼女の事は云はんといてんか、あんな者女房やとも何とも思てやへん。それが證據にまだ一遍も見舞に往きやへんので、此世に可愛と思ふのは、菊江、お前ばつかりや。」

「まアあんな事云ふて人を喜ばして、憎くたらしい。」

「痛い。」

「ヒツ、おて……やわからかに……たの、たのんますウ……。」

「あ、酔ふてゝも怪氣しよる。聽えて氣がもめるのなら、皆手叩いて唄でも歌ひいな。」

「唄結構、お元どん三味線の變りに金網でも鳴らしいナ。清吉、お櫃の蓋叩け、他の者皆、お鉢の端でも茶碗の底でもかめへん、一ツ時に叩いて陽氣に往こかい。あゝ、やつた／＼。」

（三下り。騒ぎ唄へ我が戀は細谷川の丸木橋）